

芳幾・芳年 一国芳門下の2大ライバル

三菱一号館美術館 23. 02. 25～03. 06 北九州市立美術館 23. 07. 08～08. 27



「芳幾」と「芳年」は、共に「歌川国芳」の門下で最後の浮世絵師と呼ばれる世代で、本展は、貴重なコレクションを中心に、幕末明治という激動の時代を生きた両者の全貌に迫るもので、まとめて展示される機会が少なかった「肉筆画」も多数紹介されているので、2人の画法を比較して観賞ができる。

「落合芳幾」(1833～1904)は、浮世絵師として「芳年」と人気を二分する程であったが、新聞人として挿絵画家として新聞の発行にもかかわり、『東京日日新聞』の発起人となり、新聞錦絵を書き始めて流行の先駆けとなった。さらに『歌舞伎新報』(1879年刊行)の発行にもかかわり、俳優の特徴を写実的にとらえた挿絵や『新作十二番之内』(1887年刊行)の木版口絵を描いた。

「月岡芳年」(1839～1892)は、カメラアングルのような斬新な視点やダイナミックな構図で、明治期に革新的な浮世絵を生み出して後世に名を残した。



落合芳幾《東京日日新聞 111号》 1883年



月岡芳年《芳年武者牙類 源牛若丸》 1874年

力士たちが怪力で防火活動を行い、火事から電柱を守った話に、電柱や外灯など文明開化の象徴が描かれた「新聞錦絵」は当時東京土産にもなった。

題字を支えるのは、なんとキューピッドである。(左図)